

書評

Book Review

貴堂嘉之『南北戦争の時代 19世紀 (シリーズ アメリカ合衆国史②)』

Yoshiyuki Kido, *U.S. History Series Vol.2,
The Age of the Civil War, 19th Century*

菅(七戸)美弥

SUGA (SHICHINOHE) Miya

本書は、「奴隷労働に依存した奴隷国家から自由労働者からなる移民国家へ」[65頁]と変容する19世紀を「南北戦争の時代」として描き出すものである。「はじめに」と「おわりに——南北戦争の『終わらない戦後』」を含めた6章からなる本書で提示されるのは、「奴隷国家」から「移民国家」へと直線的に変容していくさまではない。「近代」を「『不自由労働』から『自由労働』と不均等に移行していく時代」[5頁]と位置づけ、ジョン・トービーに依拠しながら、文書による入国管理・国境整備のシステムが徐々に、不均等に、州から連邦へ広がっていたという歴史像である。こうした主張は、一般にも浸透し続けている「移民国家」としてのアメリカの位置づけに対する筆者による問題提起である。その根拠として「移民国家」としてのイメージとは裏腹に、アイルランド移民など移民の急増がみられたのは19世紀半ば以降であって、1820年まではアメリカへの移民数は少なかったことが、具体的に論じられる。

本書の最大の魅力の一つは、アメリカの国土が広がり帝国化していくプロセスを緻密に描き出していることである。冒頭で「小さな新興共和国が領土拡大により高大な大陸国家へと変貌していくその空間的広がりを感じる事が重要」[vii頁]と書かれているように、本書では同時代の世界と人流、移動の速度の感覚を浮かび上がらせることが企図されている。映画作品が随所に言及されるのも本書の特徴であるが、ここでは交通革命によって可

能になった『80日間世界一周』[viii頁]によって、時には気球に乗って世界を移動する際の人々の興奮や感動が想起される。加えて筆者は、情報伝達の速度やネットワークをより長期的かつ広範囲に俯瞰し、「最初期に到着した金鉱堀は海外組が多数を占め太平洋を往来していた商船や捕鯨、ラッコ漁の船が伝えた情報のほうが、東海岸やヨーロッパへの流布よりも早かった」[54頁]という。そして「国民史の最終章に登場する都市として最後に登場するサンフランシスコは300年にわたるスペイン支配下でラテンアメリカに張りめぐらされた交易ネットワークと、より強くつながっていた」[55頁]と述べる。そのうえで筆者は「黒船という蒸気船が日本にもたらした近代の扉は、太平洋を挟んだ港湾都市サンフランシスコともつながっていた」[同頁]と、話を日本につなげていく。かくして、どことどこが、いつからどのような形でつながっていたのか、そして日本はそこにどのように布置されるのか、陸と海によってつながる時空間の広がりとその感覚を伝えることに見事に成功している。これらの箇所は、グローバル・ヒストリーの知見を多分に意識して書かれた本書の白眉だといえよう。

もう一つの大きな魅力は、資料集としての価値も高いことである。限られた紙片の新書ゆえの制限にもかかわらず、数々の史資料や表の提示が、本書を非常に豊かな内容にしている。地図や図表が多数掲載されているほか、文字史料の全文掲載（奴隷解放宣言、ゲティスバーグ演説、憲法修正第14条）もみられる。本書を読んでいて、何度か自分が学生時代から使用している『史料が語るアメリカ——メイフラワーから包括通商法まで 1584-1988』（有斐閣、1989年）を思い出し、数々の史資料とともに理解できる本としての位置づけを意識したのでは、と推測しながら読み進めた。この推測は当たっていたようで、「あとがき」にこの新書を片手にワシントンDCや足を延ばしてゲティスバーグに赴いてみるのもいいだろう、と書かれていた[215頁]。つまり、新書が軽量で片手に収まる形態であることを活かして、史料や地図や図表といった資料集の要素を多分に盛り込んだ内容であること、それが本書のもう一つの大きな魅力である。

加えて本書には叙述の工夫が随所にみられる。特に「はじめに」の「水先案内人」の登場が印象的で、かつ効果的である。それは「世界史上のアメリカ

カ社会の布置をつかむ」[viii 頁]との狙いの提示によって、アメリカ史が世界史とつながっていくとの期待が高まり、何やら文学作品を読んでいるかのような感覚がもたらされるのである。その「水先案内人」としてトクヴィルとマルクスがあげられ、「彼らが書き残したアメリカの諸相——デモクラシーの実験、南北戦争と奴隷解放の世界史的意義、近代化と交通革命——は本論においても重要な論点となる」との人選の理由が述べられる。その後、岩倉使節団が出てくるのだが、共通項は「デモクラシーの実験場——トクヴィルのみたアメリカ」[viii 頁]と「近代化のモデル——岩倉使節団のみたアメリカ」[vx 頁]という訪問者の眼差しである。また、岩倉使節団が「南北戦争後のアメリカ政治や社会の何を学び、何を反面教師としたのかを問うことは、日本の近代化のかたちを考慮する上でも、また19世紀のアメリカ社会を理解するうえでも重要だろう」[vxi 頁]と述べられる。ただ「水先案内人」が岩倉使節団である理由がやや腑に落ちなかった。考えた挙句「日本の近代化のかたちを考慮する」点だけではなく、使節団の時代とは異なり情報やひとの往来も飛躍的に高まった現代におけるアメリカ理解には、表層的なものや誤解も多分に含まれているのではないか、という問題提起なのではと評者は読んだ。これは深読みし過ぎであろうか。

さらに本書では、歴史と現在の対話が多分に意識されている。それは『シリーズ アメリカ合衆国史』が、トランプ政権下でのむき出しの人種差別への深い憂慮を背景に編まれたものであるからである。事実、199頁以降の「おわりに——南北戦争の『終わらない戦後』」のなかで、南北戦争の戦後が、南部連合の記念碑の撤去といった形で続いていることへの問いとして提示されている。また、第二次世界大戦後の日本の戦後も論じられる。一方で、歴史と現在の対話という意味では、本書の刊行は2019年7月19日であり、数々な150周年が祝祭されたタイミングと重なっていた。本書でも言及される大陸横断鉄道の完成からの150周年にあたり、サンフランシスコのアメリカ中国歴史協会（CHSA）博物館の展示は“*We built America*”との誇りに満ちていた。我々こそがアメリカを作った、地理空間を変えたのは我々だという語りである。また、日本からの人の移動の一例としてあげられる1869年のハワイへの「元年者」に加えて、2019年は「ワカマツ・コロニー」の

150周年記念の年でもあった。「ワカマツ・コロニー」とは戊辰戦争の敗者が、いわば政治難民のような形でカリフォルニア内陸部のプレーサービルに移住した試みであった。一方2018年から19年にかけて日本全国で開催された150周年の特別展では、鹿児島では「明治維新」、札幌では「北海道150年」、福島・米沢・仙台では「戊辰戦争」、さらに函館では「箱館戦争終結」と、何の150周年とするのかについて異なる語りがみられた。このように戊辰戦争をめぐる、敗者と勝者の異なる語りが今日まで続いている。また、南北戦争では武器や塹壕そして戦術の変化があり、それゆえに戦死者の数もアメリカ史上最大となるのだが[83-84頁]、この南北戦争の中古の武器が戊辰戦争で使われたことはよく知られている。それは日米修好通商条約によって、箱館に加えて日本が神奈川、長崎、兵庫、新潟を開港したことで、モノの移動がこの時代に活発になっていたことが背景にあった。本書では戊辰戦争は触れられないのであるが、日本における内戦、戊辰戦争を前景化することで、日米ともに南北戦争の時代にとどまる選択肢もあったのかも知れない。

ところで、『シリーズ アメリカ合衆国史』の編者である著者は、アメリカ史が戦争によってリズムが刻まれることを示すという、大きな課題を持っていたという。本書において「歴史は南北戦争に向けて流れ、南北戦争からすべてが流れ出した」[vi, 212頁]と言及されるように、アメリカ史における南北戦争の重要性については異論の余地がない。それゆえに毎年膨大な研究が発表され続けている。例えば、リンカン政権の積極的な移民奨励政策[68頁]については、1863年連邦徴兵法、1864年奴隷解放宣言への推移と、シンボリックな意味合いと国際的なアピール等[88頁]で説明されている。だがここは、新しい南北戦争研究による見解が盛り込まれてもよかったように思われる。管見の限り、移民兵士は当時の人口比からいって数が多かった、エスニック集団ごとに連隊が編成されたという事実だけでなく、移民兵士への強制徴募(impressment)と市民権の境界を検証した研究が立ち現われている。それはイギリスやフランスによる外交介入やローカルのエスニック・コミュニティによる徴兵への抵抗の動きをトランスナショナル・ヒストリーの視点から扱うものである。同様に、黒人の軍隊編入[96-97頁]に際

してとられた行動原理は、筆者がいう自由／不自由が表裏一体となった強制徴募の具体的事例であったのである。

むろん、新書という紙片に限られた書物に、南北戦争についての膨大な研究から取捨選択する作業の大変さは想像に難くない。よってこれらの点については、ないものねだりと言われるであろう。グローバル・ヒストリーの最新の知見を盛り込み、アメリカ史の斬新な歴史像を描く筆力にあふれた一冊であるのだから、なおさらのことである。事実、2019年に2冊の新書発行という筆者の「荒行」の敢行には驚嘆の念を覚える。本書は、新たな新書のスタイル——資料集的価値と物語的なストーリー展開という魅力にもあふれている。筆者の言葉を再度借りるならば、「黒船という蒸気船が日本にもたらした近代の扉は、太平洋を挟んだ港湾都市サンフランシスコともつながっていた」[55頁]。このようにして本書を通じてどことどこが、いつから、どのような形でつながっていたのか、世界史のなかの19世紀アメリカ——その陸と海——に我々は漕ぎ出すことができる。